

展望

梅を詠む心

齊藤 梢

花には、見る人の心が映る。花に心を寄せるとき、その姿やかたちを見ながらも、私たちは花をみている自分の心の裡を見ている。

産土うぶすなを汚すのはなに梅真白

朽ちてゆくばかりの家や梅真白

この二句は、福島県須賀川市在住の永瀬十悟あきひろの作。一句目は、二〇一三年刊行の『橋

後に詠まれていた。「放射線は五感では捕らえられない不気味なものです。今はここ福島に生きるものに対するいとおしさや命のかけがえのなさを俳句にすることで、その不気味さに対峙しようと考えています」と「あとがき」で言う永瀬に、三月十一日以降、季語との葛藤が始まる。震災後の梅を見る気持と、その梅が咲いている環境とが、季語に覆い被さって、震災以前の「梅真白」のイメージを「汚す」。怒りと悲しみの声である「なに」。そして、従来の季語のもっている役わりだけではなしに、現実を描写した「梅真白」。汚されてもお、産土に命を保って咲いている梅を愛しむ永瀬のまなざしが「梅」に届く。

二句目は、震災後の時間を内包して咲いている「梅」を詠み、二〇一八年刊行の永瀬の句集『三日月湖』にある。さらに六句引く。

逢ひに行く全村避難の地の桜

けふの桜むかしの桜橋の上

桜満開どこかでだれか泣いてゐる

除染袋すみれまでもう二メートル

防護服のグスコープドリ麦を蒔く

鴨引くや十万年は三日月湖

福島第一原子力発電所の事故による「全村避難」。その地に咲く桜に逢いに行く作者の心に映るのは、「けふの桜」と「むかしの桜」であろう。三句目の、現実に見ている桜を表わす「桜満開」には、原発事故以前の桜をも想起してしまう。立入禁止となった地を「三日月湖」と表現し、放射性物質が無害になるまでの「十万年」という時間を問い続け、未来へと「麦を蒔く」意志。句集を結ぶ「耕して握る真土やとこしなへ」には、生まれ育つた地で生きる祈りと願いがある。

震災前と震災後では「桜」や「梅」や「すみれ」という季語から感受するものが明らか

に変わった。桜も梅も咲いているけれど、それを見る人の心は震災前には戻れない。

梅の花ぎつしり咲きし園ちのちゆくと泪ぐまし

も日本人われ 宮 柁二

今あえて昭和二十六年刊行『晩夏』の巻頭の一首に佇む。この歌について後に柁二はこう語る。

梅の花ことばは「澄んだ心」「高潔」な

どと日本人好みである。梅は古くから日本人に愛され、万葉集には一八八首の梅の歌

がある。それは花をうたった歌ばかりだが、古今集や新古今集にうつると「香り」が梅

の歌の根本となる。(中略)さて、現代は

どうだろう。世界大戦に負け戦後のさまざま

な苦痛を経ってきた日本人には、梅は必ず

しも昔のままの花ではあるまい。

と言ひ、「梅の花」の一首について述べる。

これは戦後早いころ熱海の梅林に遊んだ

ときの歌である。この歌の五句「日本人わ

れ」には、梅を愛した民族という意味もある

が、苦しみの回顧、戦争への反省もある。

(『宮柁二集9』「ことば歳時記」)

昔の梅と今を咲く梅。宮柁二の「現代はど

うだろう」というこの問いは重い。「令和」

になって初めて迎える梅の季節、私たちはど

う梅を詠むのだろうか。